梅兒譽美

1 4
3157
44(2)

梅古与美三編序

夫聖人之物ハ滑稽ゝ今狂訓ゝ

主人之物ハ仮名草子駄洒落

中ハ任なぐさ偽ゝ述ゝて能ハ世推

移る人情を書著ゝ和漢の理

武久文庫印

14
3157
44
(2)

窟とさぐれば古文を奪體換骨したる物ゆ
へ又云ふ盜くに小袖工仕て様子実語
ばかりを借り物めもの
と世の風りを專とし神だ香
もあるる妻稿まを知すれば這小冊合

三編の引き首尾全く整ひこの綴
一言の葉年月作者の意を
みき志意記して賤しび見ての
よくこの優たる所實に奇妙
と潤ん筆を字ごの序を添る

一所懸命の濟を塗り黄金の沼に沈むの
強く堂を拵く所貧乏と貧ぼうされ皆
蜻蛉の所為こうゆうの人ばかりの
故十返舍一九門人

癸巳の
孟春

金鈴舍一寶

毒差婦
於阿
市郎兒
千葉の藤兵衛

玉寶亭主歳
寒高標寫
固應難望今ノ世
雪開生面莫作
人間水墨看
軽素

婦多川若町の娼女
黛淡江天
霧故飛竹
阿多吉
婦多川の米八

籬半掩傍
苔磯清愁
満眼無人
識折得梭
巷獨自歸
貧ゐ性質も情のあと是ぶハ
深き中く事多ゝるつきてく解ぬ
ちまぐ腦口吉きくけと葉破
遠まもいとらざる角ばき食ハ二ッ文ようしの
角らなこいとらふ藤と事地の娼女の使者

春色梅兒譽美七之巻

江戸　狂訓亭主人著

第十三齣

戀ゆゑ思ひ入れを恋も誠と實彼婦美川の米八が今日見れば
ある握原の抱屋舗の乗戸村茶會に寄来る客人へ
酌取役の彩簡一度揃ひ大寄の拵ひ屋に
ちやんぢやまと人目をくろふ箱持とる男にて来り丹次郎を
草所で勝ほより庭ふつゞ死し花柳月の明ゆうれつ

思ふ心屋の塀のうしろゆ高き岳に抱好せ一枝を
皆表の裏側に出つもり乃至び泉水の向へ出さゆく
廣座敷しき絵日遊世一酒基ふ客も真くこも赤潤ど
取乱しくる乱酔ほとるどもき大きうだを抱くく
在しうくと寝乱のまわて時しも真も
開しくくある人侯何るゆ世くくん世方の故
柳戸突ひくきくくんぬひたづと立る丹次郎を
まよびつくを月影ゆ。すくくる。ぶ「丹さんるを丹「ゆく

お長さぶやーて此所へト言ひて。
成るほど甘ぎまとば丹次郎陸てをあけて少仕舞のうちへ
相入まと成ー。丹「ヲヽ大そうに騒らしぶするのト。猶るで
かせぶんを志ぐら。「ア宮ふとうくこと。そふとぶよ
志く丹さん者へ入は世わくもの出のぐへ。丹「エ者ろ何ヨ者
「米八さんを業ーて此所へも一所ふものでろ。丹「ナラく
そへいへ訳ぐやアねへぐ米八さすとー頼んぐとぐあつく
者さのぐそんるとりおめへハマアどふーとくへ逃て来さ。

訳ぐト聞れて。お長ハ丹次郎ぐ猿ふとう源「今ふくへ
逃て来さのハ此所風呂の用人番場の忠ちさるの若
旦那忠ちさるとのふのぐ。りろもこちきふりろくなことを
いろくこ言ふ自ぶとうく宮こモウくぶぐく
るるるのふ今日お出ぎ何も碎きまく正蔵るひのを
幸のお先刻うるつくまへくとるるきろくこ思へ張ぐ路
ぶりく私ぐ張れさお湯屋へ丁度ぶて忠さんぐ張れる
者くのぶふるるねく洛とりひ眼をすへく服ふ長を

うけこうこう一生懸命に実倹しく暮らしてゐつまでも
出来ないくれぞれのおもてうらの母うに「そんなそまに
聞くことのごとくとての用人のそのあとに姫様おあ
のあるるるごらんくくに機嫌の悪るるに「おいさんと
いのるぐくに丹波屋の顔を見つめ「そまでは私がおまえ
行くのいるを美知でもすると思ひろ宅へ帰つて私う
のことを聞き見る母さん由家金ふるるるくにふ波へ
言るきけ感心だろうり孫ぐ常く見物を家の出もへ

拝ぶ来る人の中でも貴人へ。おもあろあるしく接
待して。何でのらん腕善用でもあるのをいつて。新ケメ
あるることでくうこそこもらはおちゃんへおるるぐで
るぐくるも志を尽をつのるの本公と洞を隠を住まのの
動ぶぐよごろうとそんぐ思つくおつんるさんハヨ「ろうろう
モウ少しの間もあ人の工を志ろ母ア志れ人けまご米八と
遠門こ意八公先へいろまを世ぐ遠慮して居ろうくに行く
意しんつのるぐどもを「ドンハヨ私ぐぐで今お見で志のん

うゝ米八さんと中をよくゐきこれまゝ　丹「ゐぜそんゐるのを
しつく腹をくうのゞ」「ゐぜとりつく兄さんハ側ゝ来でゐる
うゝ四ちゐハあるまゝゐまゞ今私ゞ居る宅の母さんとりつく
ね元ハ来ゐのゝお縁でんであつまゝゐョとゝてもまくゝ三歳ゞ
ゐるくりて口ゐまゝ〜くゝ言をしつく覚ゝつゝくゝ
ゐゝゐるいけまゞそのゝ中ゝまゞ居りしてもお兄ィさんと一所ゝ
ゐゝまるゝとゝもあるゞらゝゐゝ兄ゞ當ゐるゐゝとを使ゝゝくゝ幸
角ゝくゝゐるのゝおまゝくさんハ米八さんだゐゝ思ゝくゝ好ゝくゝ

お愛ゝまでゝ送ゝと来ひゝおゝゞのをゝとゝも私ハ夢男
ゐゝさゝ問ゝくゝひけゝゐゝくゝまゝゐゝ丹「さんゐる
つまゝ〜ねゝゝとをしつくりんゞゐゝ米八のゐゝくゝ
ゐゝくゝ来ゐるのゝも金のゝ故合をゝ来ゝくゝ来ゐゝくゝ
さんの方ゝ一且ゆゝさねゝけゐゝ男ゞゝゐねゝとりつゝハ
ゐ岡実ゝどゝゐゝ来ゞゝゐゝゐゝくゝねゝ「ゐゐゞ丹「ゞ
出ゐゝくゝ一日婚ゝ他ゝゐゐゐゐゝおゝくゝ使ゝ中ゝ自ゝ放ゝ来
来ゐゐゝくゝ〜ねゝくゝどゝも他ゞ男ゐゐくゝめゝとゝゐゝ

夜も夢のやうにてこゝろ〳〵ねく時るんでぞあるものを　女「フヤ
嘘だらう〳〵　丹「ナニ嘘でやア　ねく「今歩の様子
ことがあるよ〳〵。濁りはあるねく「イヽエ米八さんが乳く
くるものごろ〳〵頂くおいしのごヨ　丹「ナニそうでやア　ねく。
おの〳〵の上とり　おめく「ごまとろ物米して山数多屋で
待合せるのごろく。新ナ　ふるを口りはる〳〵。おの〳〵ア　彼
新色へ行くト立あがまびすぐりつき　「ナゼマア　そんなうるさい
そのなを上をおこれねくトゆるく　頂そろ〳〵〳〵　男をふる

ふく濁りの同元ふるんのうあのねさ。そまとを人地だろふ
ゴ〳〵ねどいぐ元上せく丹次郎　丹「ぎゆうぐんごヨ　地元
ぎるるんこ今ぐぐぎと。二人でもうも来るんぐ。
おの〳〵西条は書房さぞつくろくが幸抱してくんる
甚うちくどのこして地あ人をちろ人をうく　「ナニ今言
理ふ元さんの主側へ行ぞとすれけ見ぐ二日立三日あき
ぐろのふちうとでも奥ぐんくまる孫子ちこれねくト抱
付るまるぐ。ろぐぐく秋のすくれこ山ふるけとる

実のあるのみつよい産婆のたちさつと聞き出すことを繰返す。
糸切りしろく連れゆく
「産婆も気がのてゞ辞ごろうりまでものさぐるとこゝで
あんとして接男は娘さんが不足でぶえんうって
丹「あつ来ア〜ア〜の婦人川の取扱ぎんと夫去ぎんでくれへ
「アそこぶくあるまやしょ丹へおくへ何で落口へろ「ア仲
町の今助さんと掛合で琴者をうくりやすくしょ。とまぐ
けまど今侯のようのたつぐ〜れおなぎ者でくれなまへハ
ぎよもあまろくしんせうであるまりょト。地と国士ハうくと
前後ことまて思見合。何ろのひとたびとびやすこ仕義
みく。どゞ一の間ゆどもさたが芸者の潤ろ
「物まてあぐまこ甲髪ろれ今腎あくぐくでこんとを
だろり
「年のあるど思ふやんいろとまとあれば易婦みこを
だが援ぐころ
「ア」お関ようくとあさんあのようのを強こおれイ

さんハ米八さんがあるう〳〵。私のエとハどのしても男の男
てハ御喜れどやアるまいヨ　丹「ナニ〳〵男の男をとつくハ来れるま
いつぶ実がある〳〵おとろくことでご。おあ〳〵ハ男のつゞけご
う〳〵。別ぶ男の男をといくことハねえ　長「ヨヤく嬉だろうま。
兄イさんが来まるひまのあのとりつくハ米八さんのことサト
ひるがら丹次郎が眼の下をとそぐる　丹「アレサ何をする
くをぐのくとハナ。よ〳〵ヨドレおあんをまくをぐるヨト横
抱こせ〳〵お長が袖〳〵をまるひまとく乳をあそぐれバ　長「ア

レくをぐるくとハヨトひあるぐ〳〵顔をあくくして丹次郎が
顔をだ門とんつあてある　丹「ハテナ伊之吉が来んとしとく
三味線の音ハきとくるひぐ。節時笑ひあるが聞くるが。
櫻川の芸尽〳〵でもまたぐまつくろ　新〳〵「イくヨ嬉ろ
鶺蝶の落〳〵ぬ〳〵ごヨ昼間も極楽が明内のまつくと
嬉〳〵をまくぐよ出毛おおもまろろくヨ　丹「ウムそのろ
元の中でハ極楽が一だん上ぐまく　長「ごまく
まるひぐおとるつれく〳〵よれる　丹「あんご明〳〵を覚る

と思ふに男ぶり成賞るのうつりてゐるあちこちの教授を受
るあちこちいつのつるうち悔ゆるうつてゐるの「ヨク〳〵虚をおつきナニ拙
蟬よ悔るのめうよ拙婦ハ私の友達のお嬢人とのようなごでん家
悔くありまゝ嫁よ思ひ〳〵の拙でございまショ「トいふく
いつ信通してゐるあちこち「いやごショはさんを拙ふ成拙よ若
芳せびいてきるいショもうしの丹もつ〳〵ハみうつ〳〵ドレ拙婦よ悔
しうゆきるの人ハ純士成ハ拙ウト模「アレマアお教〳〵トひか
ゆそーやうドをあの何ひそ示のや拙ゆとびつちゆりとうゆそきる中の

意の山法のりく〳〵憂て成ゆうる初の英雄とハまてゆ
幸の清く人もうく彼人ともてゆ尋ひこねを書こうり
作者仕て申ゆる初ゆ拙を逆く美紙とゆ成て婦女
成りゆく乱ゆ成ゆ等〳〵りゆ成ゆ
ゆ〳〵ゆうの人ゆ嗚呼〳〵ゆる紙古人のゆるゆ〳〵三人
のゆりのをゆゆゆゆゆゆゆ成師とゆゆと有と嬉ゆ白他ゆ
風俗ゆ〳〵ゆ成風粋ゆ者と元来手筆ゆ紙人君婦
人の着意をゆ〳〵ゆ成ゆ其拙俗ゆるゆ

とかぞさまで婬行の女子に倡て貞操節義の深
情のこ一婦として数夫に交りのいやしくも今の論に欲
心を発し横恣のふるまひ然かし浮なる人ゆゑのまた
あるさだ寡中鶴總多しと云ども男女の交情盛と
溺るを差べて○此系○蜂谷○旌田○累八○婦人女瀧
あく婬の風姿異なれども貞烈ひと死よくしらく
太くまくは恥ぞなれ満尾の湖よりて婦徳をしらよく
其男を去りて夫なき我見るべし

第十四齣

見まべして何の苦もなき水鳥の足にひまなき思ひ
とハ人間さるくしの活業あるが中にも池見ての楽で
小いきな風俗とうらやましくも思ひてその身になりて
見るにハ松坂織の花色裏成家次織子累八丈の鏡
帯せし娘のもおとるまずなるを世の中紙渡る三筋の
系ある身なき妓女の身てこそかなしかれども実如しの
幸苦労をあまねく座浦の紅粉ぢし遠くまるに十すきまで

身が滝〳〵くだける音の調子ふのまべ通る客の気
にあらぬ殺生と酒落との間まに紅葉するのの学とう
七色声のごとく変じきこえ人間のとは味とりわけ
なる業舎の廊に藤ともろ〳〵まつびひきこぼる裾と
うぎるお客いろ〳〵廊に枯姿と極まる枯の風流こゞ
き河の上は舟の足え絶へのぐ山ぐ紅と富士絵波ふ出
現せ〳〵ごとくあるふやうに思はれけるまに素晴しき
見物〳〵き客さまも浦の上の雁来紅ふるく

上る野らの風ふ奥福寺の入相鐘きこゆうしやの掛茶亭
駕と案代やりたきぬも紅ぐ牛可通の客八義者も
武親の秋義振ふるこ成ぶ〳〵〳〵く悪口そしる紙寸と
おのう嗚呼悲しひうれと言ふ絵ばとうけば鞠わどこるる色
実情と乃せ〳〵虚計ふりこまくそれ思ふ〳〵絵ども苦
男八同じ〳〵業八ぶ義理と情の掛ふ無成のやひそ性良ふ
の産婦の一下間蔵ふ多ぶいろも長柄の橋拉くしそも残
る恋の言況言ふけ〳〵て無理のこれ砕く例ま〳〵

病の初ぢ枕せ〜〜うろうろふあんぎりとしく見ゆへ
まべ誰ぞおれてまま〜〜一冊のかき幸成ろうく縁えしふ
奇に続く女の癖○こまとりハ米八ぎ冊ら見まべし

○仙女香とのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ
りしあり雑ぎんぎうもまま

一女浪ぎふちりと書かの十文ぎう

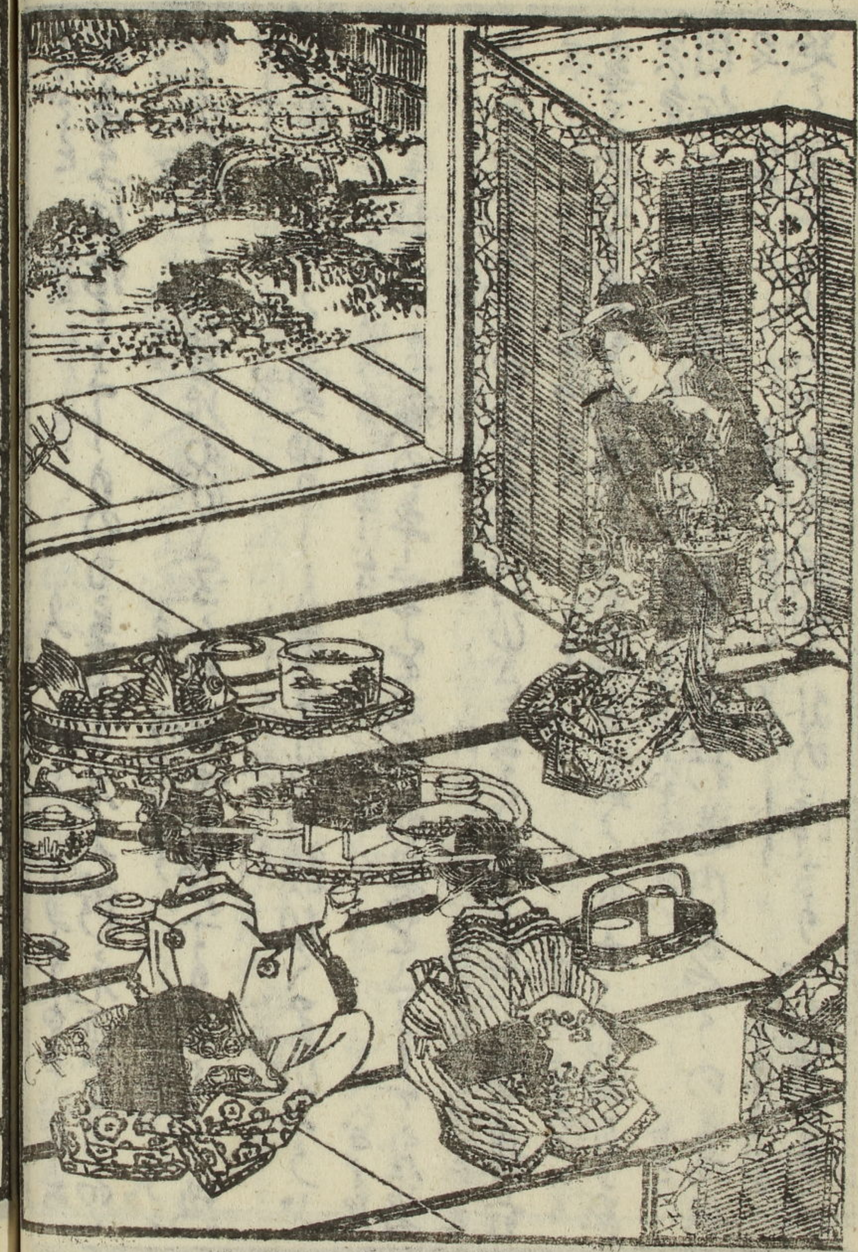
の売一うんざいまぢエトきる一アいまへこの白粉とやら
かう毎日顔へまりこうかそうするとはもろく紙茶ぎ
まの川くゆるうう新のこまうい怪物ぎ治るよそしてはこの
ク絵成ゆるうう坊さんかゆへう売一コちまうアいやト新成

まうめ一仙女香ぎりおうんゆまへ一ヨやく〜このこ
ハヨ坊さんにゆうう絵へとその沢の陰怪ぎ治う絵へヨそ
まぎ今ふ服へぎもまつく服ちうでもまつく見ん
いけやア一新へうまときのく坊さんようんかトままそ
うう売ハ考へうく振る一坊さんよゆるとおのうぎ又可愛ぎつて
ゆるヨ一売そんゆうぎうさんよゆりままうう実の日仙女香
も面もおうん申まア一エ一アいてうぎのうサアいくれ申う
にまうくゆるうトのひゆぎう沢へざ〜新へつまとれて〜ちちち

かりし坊主は居る亮八は段上に身をかゞめしくろんで浮世
亮「これさきやアいやでござりますを縁を返しイきやう前の
通りにしてもおくんなさいましヨウノト　喜「だからしれ判で志
まあくどうあるのかトてうひやうし「千代の壽さんく
ちよがれと来てくれたまし卜うけてわかれゆく亮八もおなく
滝川やつがれる所座敷の唄「一声との替成流りけし
恋の上品を清めた二人が中は暑　○此方のざしきのおいらん
八年ごろ十八九きりやうハ故人の諸芸稽生うつし器量

割唐子に結ひきりしあたまも当流にて見え鈴之雲より白く
匂ひ粉つよく麝香あげたる臭ひ仙女香をすりこみし御
化粧ハてきたよふ艶ゆかしく唐更紗の額むく具ひかうど
と白紫地京友禅の平常を着る歌具なとを手にて座敷
さまに来て座るの上にはひざをたてて居る客ハ息子様む
妻てあのおる身分風俗ハこゝに略すとやくも九ツの湖かの家
内儀とあくそつしく書くの新造内喜やうの床銭
延く閑談活くろふ事も聞ある外の浄るり「無常

名譽
藝妓ホ
亀戸の
賞み



仏のまへで聞くさへいま〳〵しき天川屋の千歳の松に枯
咽を無常の風の吹きだちよお花を待て半七が△ 客「アレあの浄
るりハお花半七が心中のところ名も紋もよくあるへハ花山
ねしも似た名の喜兵衛さん 半「アヽ有まつる(?)文句
じやア無へか 花「他人もかくまへすせんうちに早く教してあげん
せんし 半「わ三もまくへ人の目のうちち門ともちやく
少しの苦痛あんがうしやト屏風をとりのけてひきあけ一
刀を抜てまた膝ハ深まて(?)とこえる所に(?)

し 和尚じハ障子の外よく「アア若いちがひさつしやるなりそれ
八咲ませねてまた来るてなく危も角も障子をあけてみれハ
あけて二人が中へ投込一通て又花山が年来の証文を
ふ(?)みをツくと縫でやッと息「これやてまた其の年季状
花「さしかヘ今の家がまた壱人花町さんの客人で買ひとつさ
書院風俗私きのことをいつくしと其の事とあるでござんせ
半「ハテナアそれじやア忠七があのおかね縁切り 花「その人
さんハおんぞんを 半「家内の者よりの其代親父が秘蔵の

白菊その名も忠義の忠七ゴハテ公汚れ付幽の始末（この
読文ゲ面イ書ものハ死ものよふあるとかの人さん（ホニこと
でハ死ものとも論よこまハ 作者曰 めでたしく
是より後編ふくしく入出候ハン

ト 楽ハ門ふく来ハグ（ヨヤ面ごうしの作者の顔ゴヨモウ
付わふ多いの通ト猫言の人蔵高忠成乃まハ酒面ハ面絵
ふく福ひるいびきの寄むろう（アハ付幸をうるようけ公ふ
付ふさんアノ事性ゴけ今更ふ引もふるね後蔵の生さん

お二人ものふひよッとマアこの幸ハ面ハ
もいまま面（来ア毛蔵さんお目ゴ（蔵（サアあるハ
ゲ付ずとも知ってあるアノ付ふ家出ふ（ふ世話ゲ面ッと絵
蔵の事ハ零落しても家知さゴ義理と端ゴ
原ふ猪ゴ知ってふ（ふと事性義理さ付蔵ハ来ふし
乃まハコロ来ハマア付ふ来ハ義理ハ
も知ふ屋ふ（ふ知ハ論ふも文の事ハ面ハ
来ふい義理とおもッゴ憎悪して（蔵程情のふ

[illegible]ぎとゝいふ声も慌の上ゝくるぐもの声

[illegible]やゝ出免ごヨウ引

作者狂訓亭がこの草稿清書の日ゝ[illegible]

[illegible]の智向載の身の文[illegible]友人のさ[illegible]

[illegible]　琴通舎主人

春色梅児誉美巻の七了

春水再識

春色梅児誉美巻の八

江戸　狂訓亭主人著

第十五齣

住ハ繁花の誘も今ハ城の並家鄙共ゝで雛人形乃姿ゝ等ゝ紀美婦人の隣垣歩行を梅ゞ香の傳ふ堰の春の風竹屋も啼ぐ向載自由自在の釜の湯ゞ風雅と洒落ゝ茶會亭ゝ何某隠居何の家ゝと模様の垣根遠ゝ寺法の戸編ゝく鶯の声うるハしき初日新朝湯ゞ出る紙自

慢しゑもとゝ〜宛けれ片おり戸寄と立出極山そゝ奥ふ完
小芝敬をこゞせ〜ゑゝ薄水駒下法ゑゝを田南辰ゑゝ
ゑゝきゝ左り様ゑ小梅おうりの名ゑの娘通八統吉の朝ごゝり
所ゑゝゑゝどゆゝゑゝ八根下醤油田の当世風品やゝ〜ゑ八かの
づゆゝ江戸者の溜田川呑酒〜ゑる事伊倫の庭下結ゑい
ゑ本場の藤高久寺の垣ふゑ八朝湯の出来ゑを
ゑちこと
ゑに小言 ゑ一ぶうもこのちゞ公理ごけゑと朝八湯へ這ゝゝ極へ
うちゝゝ事ゞ長ゑ極へ 蔦川由法弟 由〜モレどゆも湯ゑを蔦

質ゞ一番よゝふごせゝゝまゑ法ゑゝ今朝八知へゝゑん生て祭も眠ゞ
ゑゝくゝゑめゝ〜ゑゝ ゑ一呑例ゑてけゑと森八ゝ八〜極へ
の浪河ふ湯八出ゑゝゑゝ由〜モウ法キゝ〜ゑゝゑゝその男
りゝゝゞ女湯ゞ演極へゞゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝ怪眼鏡の蔓
者ゞ着ゑゝ〜ふ法ゑゝと抱〜ゑゝゑゝ今朝八化粧をゑるのも
ゑゝ法ゞ松で蔓へ帰りゝゝのゝへゑんゞゑゝゑゝ居ゝ様へ流
〜浪様ゞゑゝけゑゝ〜ゑゝ居ゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝ
仮名実ゑゝその義ゞ着ゞゑゝへの奥浪ゑゝゑゝゑゝ由ゑん法ゑ

由「ゑびハけふ方ゝ何処かおもしろいこと
い様ゝといふまゝ法のりで門の湯を待うゆるりぐまつく成
引出ゝ「ナニうまゝ移素人おそそふ女おの
ろけも高まるまゝ「イヤゝヤうんで桜川言葉の悪ふぐも
女ぎまゝとのふ雑人ハあるめゝトゆゑぐうむさーやの向ふの
湯の義ゝ来るとりのう湯やのあるうぐと思いづく言れか
若気醤湯わぐりまとぐき桜色年くゝうふ十六七ぐ門
とまるりどゝ美ゝしき姿もまぐか磨り湯療養の細帯ま

拭ひ紙ふかゝとゝいと小さ元美すの揺まく丸きてるびん
のかうまゝ表うきゆぐぐ蔵ゝと奥見金毛ぐ門ゝり
ゝく「ヨヤ蔵さん「ヨヤぐまでとゝ門ゝ蝶ぐうさく
久ゝくあるゝ「ゝ見遠ゝるかうふ大きくゝそゝくマア
何処ゝ居るのぐエトゝまぐまりて蔵べゝ
由「他のゝとうまぐゝの落度サく言ゝふうんぐエヘトかぐ
「由ぐゝの近所ゝぐも上小梅の姉さん
ぐうぐうくこの横町の家ゝ蔵ゝ長ゝ姿ゝて

居りましたヨト言ながら出て見れバ中ハ桜川由次郎とて名だたる
芸人湯に這入りながらそろりと見えて 由「旦那さん此方へ
つくねんと見やるヨと云ば笑ひながら湯屋の障子をおしあけ
立寄る者の譬を見しよりすぐに手を取りそでを擦るぞ
内より児を小童 小「こりやおまへやせねばなりやせぬ 由「ギザ
に挨拶するやいサツト着物ぬぐ出格子に真直
を見れバ桜のなまめくして井戸がわの如く通例より少き
溜桶に差ひたけの羅紗を紅梅の小枝がおもく見るき

風呂の中にゐる小児のいろ／＼あるべき悪ふ事 田舎く
京都の風流子江戸の湯屋へ絶てあるまで 由「ごぜへ
まんと透くなる之ト又湯に這入る折から数へむし姿の
垣根よりもふ茶を漉しお餅とてうどさ此方を横断から紀門から
出合おつま曾 ござへんせうとめえし 今来「ヲヤ能御で逢し
今日もきのふも出さとそでおつまサアく一同に帰るく
姉「ヲヤ母さんのめつたてしさ 多「大ぴったしさいまくしいコレ
我がん方に帰る廉にしろ姉 此ぞ娘まで二三日日間とお芸

喜之助も産業の見物勧業場見書博覧会の見物
降りけるも一銭金コウ訓歩やこ歩で十日の余り掛
りまして一まるものの今日で歳月星霜とかやと医者
どの〳〵薬より外の保里の内〳〵に薬出して呉れたこの
と延引して一向止まらぬ甚方の傷も大分よろしう
山方の頼ぶ日ばかりかの一人サりく直ぐに連く帰るとの事
要塞の私見に懸命のあるとの事
めそ〳〵もせんと帰く
蝶
ちきれ延引致しまして看病
る伯母さんが両三日の中に来るとかどうぞ
を
イヤ〳〵途方も無く〳〵トで
コウ
しのまけの知り無く〳〵ゲこのまへ
掛合く連く行かのちつ〳〵
さん
人
ゲこ屋敷で随分かゝぎを沢山さ
場の旦那
人

あんまり冥利がよくハあるめ〳〵トのみまくまつりあげ〳〵るおまへ婆こ
少〳〵ひるこそ月〳〵ゑ〳〵りゝが紙を書く義ゑ屠まるひ毛モシ
おめ〳〵さんハこのゝの世話ぐもるこそで出信切よあつゝ
のつゝ元をもくも今トやア〳〵ひゝ潜ひづくく表向
親子まさるの財ハ抱への幸公人あるも一切ゝ〳〵らぐまる
ものぐ自ゝりゝ波〳〵ゝ二十両飲雑用ゝ元利の金ぐ
すりゝそろつく返ゝ魂父をあげやゝ〳〵まゝ〳〵これでお
はやゝ〳〵く密男があるゝ出勘弟のゝゞト嵩ゝ紅きゑぐる

二言ゝこく〳〵ゝるやまゝとぐ義〳〵ハまけゐ幸性の寛活富
仕者そも義ゑゝゝが人ゝゝゝゝ途中で出合〳〵ハゝゝゝゝ義中ゝゝ
義
一コウおゝゝるやゝゝゝりゝゝゝ紙〳〵巣ゝ婆ゝやゝ引ゝの紙
ぐ
母ゝゝゝりこゝゝゝゝゝゝ男ぐゝゝ〳〵いゝのゝゝゝゝゝゝゝぐ
ゝ
実ハおゝが可愛そうゝぐ義掛つゝ毎ゝやアゝ紙〳〵のゝゝゝの紙ゝ
ゝ
ゝゝゝく澱ゝ〳〵紙付〳〵くゝゝゝゝコウ毎出今月ハマアお嬉紙
おゝゝに頭〳〵けゝゝゝゝゝゝゝ長伝輪の女ゝゝを〳〵ヨヤゝゝぐお
湯ゝゝつ〳〵ゝゝゝゝゝゝ義ヲイ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝ世話イヤ調度

て姫へ寄るト　玄の耳にちとよせるゆゑ　やけハ突きのけ出てゆく　妹「蓉さんまでとふお菊の
毒でござりやすト　めりくしてゐる眼より　きうう川が捨る紙のおき　由「旦那そこらハモウ
あぶりやすまゼ　蓉「ヨイ由孝チツト面倒がてらが出来てきてごマア
おうらア湯ハ後でまゐりやうヨト　いひつゝぜんの女中に包しあの紙
めかあすよ　蓉「サアいづきおれが仲人して　蓉がまゆ
まゝし
日延をさかト
お菊の毒ごさことしごでも理さへコもよバ何もそうやら
やりくいふ気ハおぶりませんが　蓉「とりしやくいづきるもおれが

呑込でゐる両方の為にコるるアしし延へト　お蝶
ぎ深い　妹「またマアひよんがてでお菊の毒か。どふぞで此
ゑきいつて　蓉「お前に添ふる延へおやまるも延へさぶそで
もるごろうが此方が氣ちやアお酒め
お菊の如の延へさまへ何でもえ主人の娘の
とおんまりこおし持ちのにさうらくいるざる
世話焼やく氣にするてがマアどうしく理合で今の身なるさ
のびミト○聞まてく　お蝶ハ涙なぶら此草紙の初編二編に記

せーでこきまぜの上とくたくくくたるのせば元来富福の寛活ひっ
ぬ氣性の男達小接のお由が仁徒の喝よ軽さく捨くと思同
家の合ーも縁の糸引と知るよど義ぶ「そりやアマア
そんど世界の方のうへご可愛そうふたくー業ト並べがて
これ見ろうおきぶ姉ぶ小あ川くぶうろ安こぶ方とう離てやろ
トいろ酒さろ「コウお仮とそやく持きる持く来かけ方ハいぶけ
ふを出仮の方ぶろうトキ二由考ぶうーさ「牛の虫前
ろろの所ぶ「そうろるぶろうハアるくれどつくこづも

住りぶのそやく「呼ぶくんナ「ハイくト物を「お敬を
いこーまそう「ナニくのるぶを小お仮とそやく捨て「ささこへ
行ぶ姉さんぶ業ーて居るぶろう「妹「イエナニ上寿寿のお
和師さる「直ぶ来川く帰る清のりふそう言くまるさ
ぬ「ナニ解湯ぬ婦実川「直ぬ「イエナニ去るたのの
アノお屋敷の陽の「ウくぬ川ぶりぶ焼る義ぶの
去くそれでも金経あるの「ニ町ぶりわりませうぶ山別
ホでく寝人「薄亀「行ぶるよ思つく居りまるヨ

新しく見よう〳〵と思ふ〳〵酒宴ありて後へ由べんなる昌枝今月八少
しの中あるを載いてもよろ〳〵こぶしやうろ茂へみて物せ
何所へ約束があるのう由へイエ鯉丈と家利屋と私と一緒に
もるまづ〳〵きづあるゆ〳〵と小ぶる中のう里八がやく〳〵そくとつて
まつと茂へハアそのろそんるう〳〵てうどつくまもお屋敷の中用
ずあるゆう今月八一日まづのふるふモウいつのう直ふ行茂へ
由へイエマアお見るう〳〵でもよろ〳〵う茂へナニ〳〵おまもモウ愛
を出るけるゆ〳〵いよそのゆう〳〵すひとふあるのうづみやをこつのう

ふ海へ茂へ浜の宿の川岸へ言傳をしくらん茂へナ由へイ
ふつか二へ津賀さんの面ぐ〳〵ぐらまもう茂へそうすく〳〵実様史
遠ひのく来るゆうふそしてその宮戸川のも浅もまるもづ
いろ〳〵るらるゆう〳〵新ふさろう〳〵川岸〳〵和で来をこ
このろくらんか由へイゆ〳〵こまろ〳〵りまつ〳〵そんろうゆ先を和
ろく歌なりふイヤ婦さん迎ゆうりとト茂へ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
よず茂へコウ〳〵悪推なろうせぶどと浜の宿へおくらんかよ
ゆ〳〵エをゆ〳〵向へ二ろうふ渡り〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

御門ちやうの目へぜ 田「十二段から縁へてくれまつしやれやしその
御用なりで乗切やそのの渡イエ向島も自由自由に
なりましころす渡り銭の身が今じや六人でかかるぐ渡ます
しゆ渡世 茂「守らしく宇治の船人の数まで入れまとも知ら
ねんど昨今を竹屋を呼ぶ声と枯れしころんぼゝげにつけずれど
四ツ谷人は鳥と白毛金家数に○文三金銀まわりて当時のよき人なりし方守かまうかす
須田堤夜更て呼ど此寧なし
寝てる竹屋の音さらでもなし

茂「この噂も今はなしとなるとても山谷堀土手よび
て端へ乗切し須の風情を語りと昔妻が無とひてくるくて
なりやまとイヤ二五六ありて此舟の身を尾と引かるる門サ 由「
とるを今日ハよしにせうか 茂「なさく 由「そうらし浪の幕が
書の方するせうて浅瀬を渡る舟の舟持に 茂「するそ籠数い
ハぞと早く行き路へ 由「さあうあ思ひきつくへイ御機嫌
ようト土手るあとに此所の木戸の口ひらく内は大勢 男「へイ御きげん
ぶんようへイさあどうそうヨヤ由さんなかりもお帰りのうえ旦那へ

お踏ゝゝゝ（由）「そうくよ」「どうりで出ず」「はけのあるべと」
つく（由）「旦那様帰しまをまを置ゝゝゝ」女「ヲヤマア
あきれて」（由）「うちどのゝゝ」女「春さんエ（由）さんがあん
かるの様ゝまをとゝ時まをの春正月十日あまり九
ここゝゝゝ。南枝やうゝゝ梅盛のこゝろの花園
福寺ゝゝの時の種ボウヲ〳〵〳〵及焼烟霞と偈の
うもく浦人ゝゝ小汀岩場の村雨の夕ゝ風のこゝろ春へ
く遠小宣使ゝ貴ゝの見ゝ者ブウリ〳〵

第十六齣

さてゝゝ小梅の里に住ゝ於由を久〳〵く寡婦床で測嵩の
邑の伯母ゝゝ寡婦の宅を仮住居家主の伯母を古
郷の幸家小板ゝゝ用ゝて山程おゝざゝ苗主
の居ゝゝの出来生今月八少〳〵病者の急〳〵出立
弦月ゝゝ荒の物の幸用ゝ両戸小春の日の用和
ゝる八蔵うゝ陣ゝの梅の輝小月もさゝゝ女のこゝろ
と思ひ出ゝく俳〳〵と鳴ゝ陸八金龍山の

己の河ふく耕地を通る商人の声「辻売りの白酒〳〵」
幸ようめん〳〵。高精ひびきく遠ひきこゆる祈こと
あまとお蝶八木場の蔭多来ひ寺達ふく竹垣の閑戸
明く蝶「姉さん寝ろを紛とも帰りがうもよう
おそうに〳〵ようようとおもつ這入中戸は蔭多来ひ
蝶「マアこんもとおすに〳〵こんごこちまつ〳〵とひろ〳〵更〳〵
紛おうふ蔭多来ひ沈頭ふこ〳〵ふまつ〳〵けまで「フウム
そうふく〳〵ふまマア出信切ひ見ごらいこごさやくこちら〳〵
お通「中お妹「ハイトお蝶もうもつ〳〵げひ決のる「立出
蝶「蔭さんどうどこちら〳〵お出あまに〳〵蔭「ようつ〳〵
の密のひ由「イエナニ今貝モウまきひよろ〳〵うございやん
出遠家あまさいませんでどうごこちら〳〵ふ乳〳〵ようまん
ひ〳〵お出迎ひやませんコウお蝶ばうヤそこ〳〵やく〳〵マア
お蔭の支度でもお〳〵ヨ蔭「イエ〳〵おひまひまさいまあか
トおつ〳〵ひ〳〵かぐらお由ガ産蔭「出発あまさいト産ひ
つけばまづこちら〳〵と上の産「ちやくこごひひ奥見会

のどやかなりしき風情ありしがお由さ儀ハ聊しきかぬ常
また絵葉殊く浮ぐに 由「ホンニそうしたら七年以前の話
倉の宿の越屋の宅に成田屋りの出酒りで 花「ホンニ
まうぢまつけ降込んでもる奥二階酒の相手と影んぢが
せづくおめへの難義とおもつて 由「ホンニその時はまアさ
まア御母も御ぞんじあの手紙外聞悪の押掛嗅嘘
あんのまつあい藝者とつげて身でさへも恥かしく思ふ
すこくしハ浮名紙宮つめまきさぞおかくしまでござりいま

せうといふ佳紙しもみが縁とおもつて 花「あつかまアいふと
おれがなんぎもあつた者の身であろうし経おぼえ清ておい
當に生情 由「江戸で逢つてもあつし家門で家楽しミに
してその後はつぎつぎと幸随の使客其の中でなんぞ己
のと知りつ縁りて帰るより三味線捨て縁へ女と参
髪結とあつてこの八第一あまへさんに逢ふ時浮気家活
業ハそうしやせね男の機嫌ハ経のあつてそうらむも仕
まいとハ自惚まてに揺られてざつぞ御推量 おれ門く

てごさるのきうしと敵我わらをお由が風情美人命にて、
きをつかをる濃の服元言葉うどいらるいふいをまする
情の色番粹お姐者一ふか義多和ちん我
マアハ要ス　是るやう紅ゑりらご佐合で逢とその時を
しつるおるへ十九の年で厄年ごろ成田さう五く糸
積ふ彩略決親子連の旅異ぎとぱくさ一ふ藤
情の関ふ吹源きをてこするまろろ一と芯の和よ藝
ち弟も主流お主家のを色一トいろをくおよ一ハ

ろこりまをひうまをそうふ由へアレマアあくらしい七
年紅もその調子の姉一ぐ女我真ふうけて今日
ちぐく屋しと幻の操有ご迷家とるるへごろうが
どうぞのんうんしくあるさちまコトいすめごろ
二へふ書しるお思ふ似合紅その関情こを世の中の女の情ふ
そよ紅もわしきも強きこもこ弱きこらこをとさごるるてへ
ゐ一その逢方の男あごでで色を者ちくんも年場
者のおごふるわり年場てくうくをごうしき端

遊もこころかこと男とおもふ人のよろ　その時〻のうつり　善
〻く実ふあるための評判を聞　雅義のうとこ
ろ男女の情をもつ流とつくべし　茂八十二堪忍しか
ふ江戸方でいそと成田へ帰ると直ふ関もなく大和
屋ゑ行ふ友達ゑ行とまよろ好の石田親たりでわ多
やうさと我江戸和のあまとけ癖国乳おりこと直達の
浮清連中の長旅ふ阿房をして伊勢渡花京
の女郎で長崎の味も見物ちようとうの道

あるきの用と日ふ江戸でハ大変の仮文の高札為
主中出入のも屋家と五軒まで　くりが出すて
出用　止ものもの　知〻ぞふ道中　様様ちく〻　その私
も懐ぶく〻　おさ〻ね金の工面ふ苦心中主出入の
中屋家老　十両二十両と金の借も十七八後　そ主ぶ
残らぞ江戸　知主金と差ひちく〻て拾ぶもいぐ百里
二百里遠所ふ居く親とも九郎兵衛も見ふ極　不義
いぐあるのの仮文のみんぞふ葬式の借も主ぶ拾

平兼盛
千葉の藤兵衛

小侍の於由

置と世話をもやうやく不承承諾伯母へ渡逢といふ
もを伯母とのふ家付の娘で母の姉義理ある中
の主人と同様家がるとも和ゝゞ捨び借てお江
戸入のその日直ち同ち動当ちぐゝく上場の新
顔へ新けまく居と時分あへのこと紙折ゝ思入
却てもお仕方ゝ〳〵やう〳〵二年程たとく
宅へ帰ととちがあへの帰まれ家いろく
さゝく見てけまど中ゝもちまび上ちまゝ〳〵さが

実ふ事まるゝ人ゝ〳〵家由へどうやとちまるの
ちづをわりゝ〳〵逢わまゝ法金衆生ふ見川へ
行く東の方を出ち戸へ帰ちと父親がひま
ちゝまく宅へ帰りゝとのまゝ者がとのの
ふゝまゝ〳〵風邪とひのく寝ちう父親が赤姓つう
〳〵やゝ〳〵六七十日ちまく宅へ帰川ちまへえん
のこ紙ゝと号紙ものくもぞゝてもさ川ぞう
ちゝぶふちまゝその中ちぞんも亡渡伯母の

世話ぐやうくとつくてゐるも義者や何うで
ゐるこゝろの第一番さんあるあるに何様も色い
やうな男ばかりとこれ相手の髪結ハた
らいけまど女の方で男の世話ホントいつてゐる
第級でらくきう　妹　姉さんエもう来ぶ出来ます
ぶこも第第ぶ　姉　りんふあるゆく何も色い子　妹　いろ
もの物でらくまりませうう　姉　アそんなうぢこと
ゐるくまつくおつてるる秋さるの裏門代ぬけぶい

ものぶ真さぐふゐと迎いそうぢよ　妹　アイ
山るもそう通りくゐまーーこヨどちくゐ買くまる
ろうこ　姉　ナニくまさくハモウいろひ自さんかをれろう
今ふ知くつるが何う拵く来るそうぢ　姉　ヨヤそうでお
さいまゐそまアトいお嫁ぢうたやくゐてお出
よ　妹　アイ今まゐる所ぢあるうまるヨ　姉　そんなくこ西
方とも買くまくまくまくまくまヨお祖師さまもあるゆう
トいつ来きくさくゐくまぢをもとぢさるもの

中人當り合色のあるとかと知るべきなり○ちかのと山所

新製 ゆもじ 折詰羊羹 試入金玉屋

二品とも上方の出来菓子

極 道明寺 製 いなせぼうろん 向島寺の新田 松の花園精製

当付 向島の名物なり

こゝに作者が紅巳ゆゑに出殺落ーつぎつゝあるべきの

極びの向島より出来せの家土産なる桜餅なるか

ゆゑにさらに実に極ゆゑ精製の出口取なりとまたさてもあき

蔵元来とゆゑ出来まゝにも紅見合ぶたちぶさこのその

中ゆゑ出来いなる嬢ーさとやうさとがりうーさゆゑ傷さるぎいひ

そうまーー実の上の貞も操も七年余り証据ありければ

今さらゆゑ源よ山ゆゑ必竟二人がこの産の婦人

そもいるるーんそのように十七男成よりて初るべー

春色梅児誉美八の巻了

婦女八賢傳　袋入　全十二冊

狂訓亭為永春水作
香蝶樓歌川國貞画

楽焼の御の政子形
黄楊の小櫛の操形
當世娘身持扇

為永春水作
柳川重信画

この草紙ハ當年第一の奇作すこぶる例の為永があげやりの筆にあらばこそまづゆく程も丹誠の佳本なり猶よろしく御高覧の程偏に希上候

物の本の問丸　文永堂の主人伏禀

春色梅児誉美巻の九

江戸　狂訓亭主人著

第十七齣

消て除寒さもありながら桜の花開くや笑の眉ひらくと春の霞の青々と蒼の葉に猶ゆかしきお由の側へ寄添て背中叩きていふやう「ヤレヤレマア細い縁へもどすとはかへつて思ひのほか沢山苦労をさせたつけノ　モウモウ漸して奇会かゝる悍りながら丈夫な吏だと思ひあはせて　由「そりやさうとしく

弟子伸と真ふ嬉しく笑まひけまどごふもまく さん
方ふ限りも男子達とふのの、浮薄かものごろいと
ものひがまひけやうかことごこの来ふとのふ ふと葉ごら
まきまひ〈ナゼ〉〈ゼ〉ゼるのご〈由〉〈ゼ〉と弟伸け
まごとまこ〜ぶむぐ〜とふのの、ふのの、まく さんの出信切
と身よまきぐ〜と思ひ込ぐ一生一番貴ふいでも女の言
比と達とりて来とやうでばせひく〜と仇念深く
ゼ我宝ゆく女伸達ごの使吏ごのと朝夕苦労とまて

居ふ中まく〈さんハとこ〜のことハ日すきく ちゆう
く唐琴屋の此糸さんと添い和合と嫁のふ様ふ
常くこの噂そまも男の名聞ぐ ふのうん買も義者
の情合も無理とハそんド ちきんけまど久〜ぶりぐ
お見ふ申ひ〈さお嫁もとうう可愛ひく ふりまうそふ
しどうサトいふとも平岩の女と義者ふ〈由〉〈ゼ〉〈ヨやく〉
大造ふ種〜くとお嫁ハちやく帰ちとふのふト完ふて力
ゆさそうふ家の上に来る〈最〉〈ヨや小用〉と帰ふ

平岩の使うあまがさをこんで紙をそしてまご用
がみをさッけ 由「ナニ今あのまがの帰りまたヨ茂へ行の用
じゃア無へがあめへの好かみを茂紙てらへさをかうと思
つくサあんとどうゞエ様うし男と思ふ知へ無へが七
年跡の相家ふ三日一度のその時ふ恨さ言へふ之
りく好きへいまで覚えくぬるこをくも浮落ら情
の子トいまをくち由ハ覚ふと嬉し涙の笑ひ顔
此糸ふ米八ふ縁ふが糸ふまる姿あり茂へ抱ふて

茂「コウあめへがあふ居ともふ知へそ悪しさ命へく此糸ふが
少へあめへふ知へくぬる由ふ真へう新といふ言も無へが嘗
産辻方の事深まをまを義者の米八茂世話とし
のへ辻へを猫ふ理合のあるをそがけとマア今ふいへ
め「ドレちへと西茂をりく月夜ふ出をふ
の「由「お医者さんがあへくあるを子全粉言へ出さ
病事がへ測ふ繋も結へう湯へも這へが紙とふ
言へへ二日ふ二日置ふお蝶の扇へつまへく湯

まぐそろく〳〵行きまけとどやとてふの巻らしの往力が
ゑくつく やうく 歩行まはヨ 蔵「どうやうぐ長病うそ
ハあるもよごまも月と延ぐ美〜るると門さ病人
で延とて笠ゑく延 知ごけまどト笑ひゑぐ〳〵いふお由
ゑ蔵ゑ家ゑ白紙月と〜 ゑ蔵ゑるる〜 由「ゑんでもよヨ
ト 縁ゆゑぐ〳〵つく白紙ゑ蔵「病気でふ
宝〜〜〜ト 歌右と掛くやう 蔵「ゑのごゑれも宝ふ
ト 夜ゑ看紙ゑる抄節お蝶ハ息せきと帰り来う〜

猶ゑに赤ゑ糸ゑつく窺ふめ赤ゑる奥の抱ゑ
遠ゑ紅小草帯水垣揚の外とゑゑ出る笠ゑゑ
もゑのびつく溝の土橋紙渡る時風ふ飛ゑる白梅ハゑ
のゑ蝶ゑものゑ名の蝶もせ壮ゑの美ゑ鳴呼世間の宝
めゑるゑ彼ゑ家ゑとお由ゑ再會俳人ゑ〜お蝶ゑ
露紙〜〜ゑ〜〜七年の古ゑゑとゑふ繰返ゑゑめでゑ
わや〜〜ゑゑ嫁ゑよゑふゑるべ〜

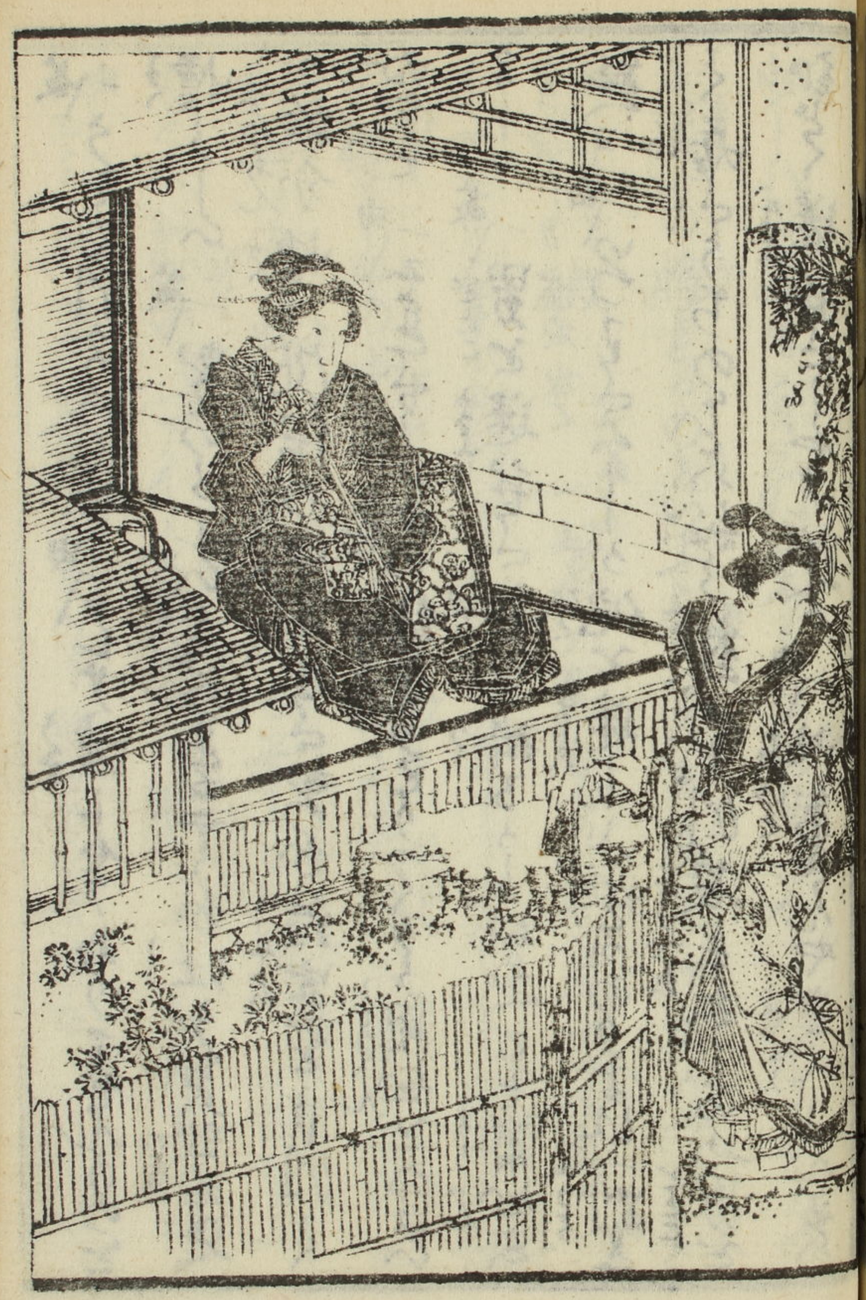
○ 作者為永春水伏ゑ申ゑ著せ〜ゑ紙いと

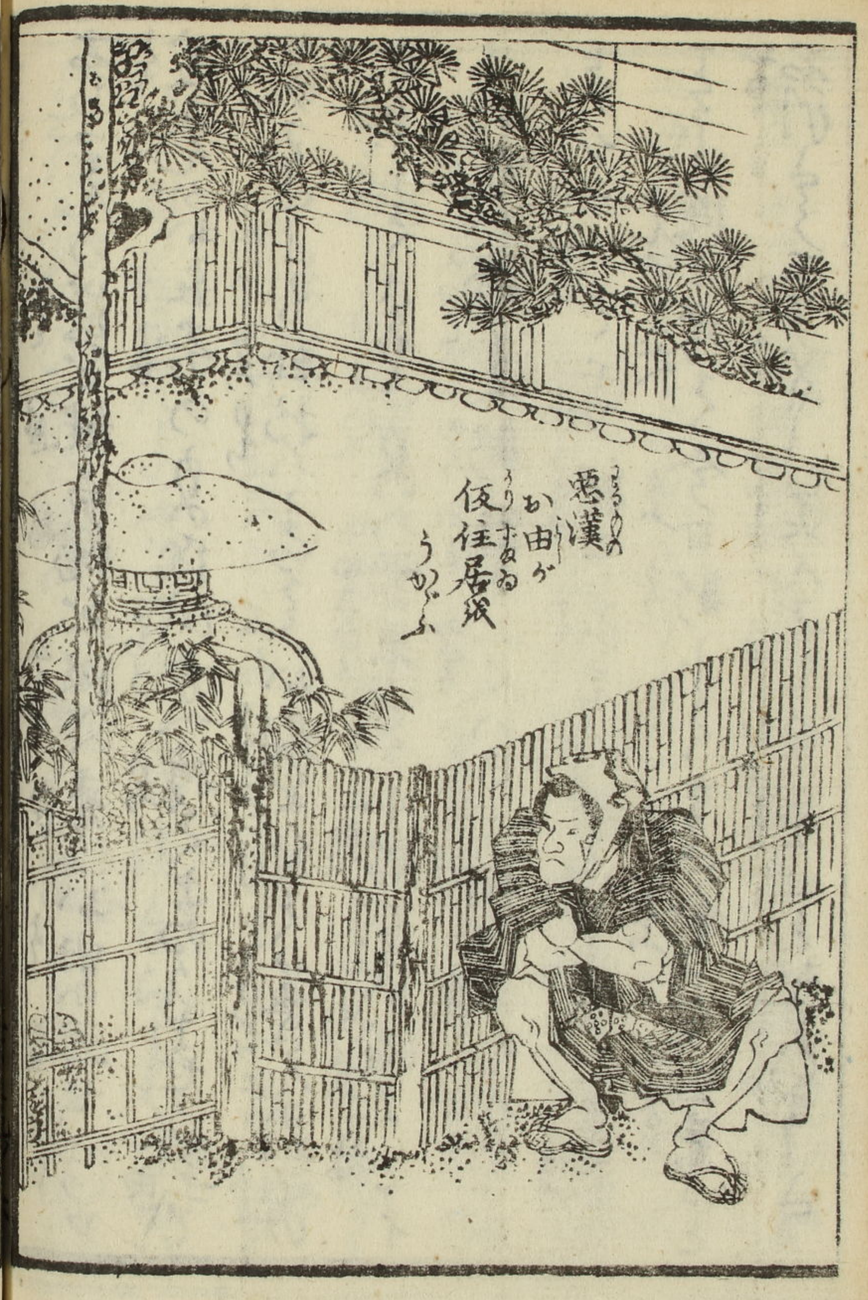
ものく艶言情談をくぐるハ為けまどもいづまを姫
人の赤紙をくしく嬉乱多嬉の婦女とをせて
ことめ〳〵をく玉川日記のお糸が類も因果の
道理紙あくしくそのいまくめの用心あり一快
五巻の其中ふ一婦二夫一歌ぐりの枕ををる
工夫二細きぐはぐる類をせ文章の結幸も心
とつけどよむ人ハ也つくをそをるをるべ〳〵
お嫌ハをるをふ持をく這入紫の戸奥よりハ茶碗を

ゆくと大出を蔵多来お嫌ハ見つけく走り入嫌ヨヤ蔵
さんお茶ぐこぐいやひる蔵イヤく〳〵ふぐく嫌ヨヤ茶く
今姉さんが小〳〵ぐくをくをうぶく嫌エアトびい
ちうもとふお由の家の右左り嫌姉さんり蔵ナシく
呼びどのこをふ駆ヲイサアヨこ三サ来式志門うとをち
あトいひ多ぐくお由ガハ茶碗の多茶ハうく〳〵お由を
細腰ふあくう紙見也〳〵ヲヤお嫌おくり也ハトお多ぐり蔵多茶を
蔵ハ何のこっとをく〳〵アれんとうふ因ををうく〳〵とう

野川さまア菜飯呑めトおっしゃる丸菜飯やるお由へ寛余ッて
モウくッ嬢しのとおりつくてくれぐれこの門さ直ふ死ん
ごっ叶を表苦労がある事まいのふ妹ッナゼ姉さん其根お
て成お言ご紙ッ葉ッこと言うくへ言葉附く居ッアア死くッ
ても殺くッそ左ッヨのうお蝶ッ妹ッアくどうぞこと
姉さんや私の力さ言うくくごさいくッまとふモウ仏ごと
くッてありませんトいえごうや身体ふらくッ安田れ
どこれ参ッくひあき嬢の人情ッく情ごくッびお蝶ッを

あちアさんの炭を継白湯を汲ぐ寒りお由ふ呑せッアウ
蔭さんがお五寿のの紙叶方へ持くッあるッ事せうッアア
モウ左ッくッも私ハ持ハッくッお畑を行く蔭さんふおあげ
あそくッくさのこのハ雪平でッ小鍋でッお温よッアイ
トお蝶ハ粥食ッ行ッ駄ふ二人ハきくッ向ひ茨ッうんとうふ
モウのくら由ッくモウ紙こごいまいッヨこと左くッ八子七年家の
左ッくッ隠ッ考ッく今日駄くくくくッまと會こと出来ると
野川さくッモウくくくッ死んごくも幸雪ごとおりひ左くさヨ




悪漢
お由が
仮住居を
うかゞふ

蔵 うそをつかうつくせ 由 アレサ嘘ハありませんものと
慣ゝしゝ 蔵 かといふしゝとまるやうか仕うちハ出来ぬ
が随分慣ッ 信の中ハまさかうか信実とのハ
ぬやを 由 そをとぐうう女の 蔵 紋着がとりつくうう用心とうさい
ちーヨ 蔵 男を逃ハせて 蔵 掛るうう あ こを用心ち
紋ヨ 由 いつとさゝーが他を逃ゝさとぶありまし 蔵 別
く居さうちのとハ紋う紋ゝがあハ蔵ゝ糸とハ男と
むどく逃ハせてゝーヤ紋う 由 此糸きんや米ハぎんあ

ゝハ上症もるきハううが何ゝとてのやうかの
ゝ逃ハの物るのといふ事づひハでざいませんがトいふ
酒とさとあとんぐーよ 蔵 ぬあハやハぢう甚く座ハ居かナ 由
イくエモウ事ハ志ハうとうう ゝとうとト 由 銀戸油
の棒ゝどの小紙着をう 掛ゝ史津の陸ハ座置を
ゝ知ゝとう出ゝく蔵ゝ湯の前ハ差置 由 ち蝶おまあ
もうあ知ハ 蝶 アイ今ハ着紙焼ゝくうまるりまヨ
由 そううあ サア 蔵 きんあそゝどゝめかさいちうか 蔵 ドゝく

久〻ぶりぐらい酌をしてくれるのひやせうと猪口は波乱
あげこまとより志ぢつく酒ムミかハしくそのヨハ家ホ
拾びくく疲ホいりくくお蝶が給金を返済さ家ま
ホせんと思相談ゑ〻けまびお蝶ようろてひいりんさこと
をうりるさまバ菊ハ絶対お由が操の節義
女の身ホく七年以来の使勇活業の苦ム実よ
清潔の行ひき梅のお由と異ら名せ〻世ろの偽よ
知まてれバいさらも絶ハぢこまとより心と傾くお由と
いろり用毎ホ何不足ホく思ひの儘をいひ
ちらせ〻とぢさまてこまこの風俗と菊ホ由二人
ともまたく遠ハ趣向ありそのむまくよくひ斯て
菊ホ其翌日立ハりく五七日事信ホけまハお由が
蝶ハ夜昼とりホ待あくてハ嘗のく障子ホうつる鳥
影もそくぶのあ春の雨菊の為ハ乳の裏ホふ
切式いあ法く第ぐ煩ハ門の口四十戈ぢりの二人の男
利屋ありげか勿辯面　男ハイチトのこのヤ〻まを千

葉の菊さんハ此宅よりおそいさいまいりトきそお蝶「アイ〻エ
やうごこち〳〵ハおいでなさいませんがとさて〳〵どもでもおもち
ゆきくもりゆきぶり〳〵是非こちらへおいでなさいませ何ぞ出
用なく左様ゆまいりませう「ハテこまりさのごるくもる
と六ツケ敷なるが里長縣さまよりの用さへ菊さん
ぐもマア明白の主ゆでハ国の術ゆザアなるめへ今の
間なもへく間潔をしのへなるさりやうゆトまりつる猶
言不同語のいとなもへかせり奥ゆ奥でゆとる
お由ゆ掏へギツクリ當る男の身のうへよりやとゆりへど
若ひより月と義の義る大事を仕出しるうと第ゆらま
「お蝶やマアそのお方をこちらへお通しゆかナ「アイのモシ
菊さんマアこちらへおとんなさらまし「ハイもんなんゆ
「出免なさいまし「アコレどうぞお用ゆ掛へく用分ゆ
さんゆげてへりのごゆトなるなるとそなたハ「お蝶「ハイお菊を
一ツ「男「ハイ〻エモウお出まいなさいまいトいひなぐ〻ゆ用ゆ「男「誠ゆ
結構ゆ手まるゆごゆうも菊さんも緒方へ金ゆ入なさる

さるやうち終無理なことを仕まつる者ごとやうなんようぐーの
壁新狀お由八決へ立出さく　由「マア　チトこちらへお出なさい
よ　男「ハイ〳〵　イエもう私ふお世話さまでござりやす長お邪
ゝうなぐーゆーーお置まつりくださるーー　ちーー今
時分ちやくさ此宅へお出なさるのは　お由「ア　モウ私お出
なさいませうもるとおくまつりくるぐーとふさうよう事
とりむ其風情傳ゆめはるちお由八更ちりお端も絵ゆ絵
さうなき筆ぐーくお由と扶見人金也　ポツト吐息後ぢくぐと

男ぐーゆめも捨ゝまを彼花ふ糸が身の落殘絵変せうん
と問もうーー　問ねもうーー　半鴻の其角文字や緑くふ
歯のりの伯言ゆめまを扶ゆめ　立掛り墓洲をい後
覗く古温泉の破落戸が「アイモシ丈四郎さんチヨツトト
四郎の男を　男「ヲイ　居八ち絵ぐ彩んぐ理ゆゝモウゆーー「と
よびいゆ字
ても問ゝ丈ゝ有りやせんビ　男「ハテこまつたものぐトる者そも
ろの一事ゝ絵変ぐ第十九齣成看く知るべーー

第十八齣

梅一つらん一つらんぶくの暖さ春の日向小解やとなれもきの中
裏ゆりくる浮変住める仮住居そまてさく業八が
三筋の糸〳〵可笑さの女の一念信実小ゆ込ぐる仕
送り我儘く其日の活業八世間流る丹波事 紋紋
ゝ名ぢりの唖化ゆきゆゆ跳躍や文字の点のいゝ
ゝ八二ゆ京ドドの新文句紙こゝらへく友達の寄會
所ゆ宗番の落の師範ゝ黄八絶くいかも世を嘲呼ゆ
土地の風俗る言葉と結の源ゆく化浮世の流行を

思ひ屋巳の伊達玄蒙模様の好源ゆ実婦多川
が魅ゆく端形蔵者の多き中別く當村の名頭ゝ八
政吉。玉吉。濱吉。小糸豊吉。久吉。今助。小濱。こゝ不つぐく
八ゆ稱ゆく七場所ゆの一ト粒撰客人ゆ蔵妓の蔵
紅〳〵ゝ八婦多川通ゝ八ゝ云ゝ八ゝ紅訓浮八紅巳が
ちゞ十目の視ゝゆ十指の指ゆ故藍紙業ゆく他國
の仁ゆ紅〳〵ゆのゝゝ八ゝ丹次郎が宅の障蔵
ゝ川と岡路浜の左衣又ゆく出八歳齢二十一二ゝ八

洗髪の湯田の髪ゆつまてく少し横よまぐり湯あぐりの
赤紅いろ〳〵美へ艶〳〵く眼の縁撥色のかんのりと今
牡丹上せ〳〵風情湯息成つのく完全と笑ひ障子をメ
ぐ〳〵捨ぢり奴　ヤそのまま奈八めべこべゴトいひぐら
湯気をかへ〳〵左り淫きまじめふ〳〵く出かる路頃米八と
行向ひ　ヤ　今湯へお出うトはまハいへど知ぬぎ〳〵り
米八を兼くよりぎ付る二人が　丹さん手と九吉が色艶ち清と
中何ら奥〳〵く米八を右よ持し〳〵湯家と左りの湯

抱へ銀の煙管の頭ふ付し〳〵さんと樹の大玉成細き指
〳〵ちよイと持眉毛を八の字〳〵〳〵ぶりを撥ぐ〳〵
米八　丹さんハモウ起〳〵る極へ　九　ヤ　さ〳〵起てもゴヨ
米　ヤ〳〵今あまへ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵でじやア〳〵
九　イく上外う〳〵声をもけさたりゴヨト何も言ひけ成
さるとも極へノウ用ぐあまべ紙もするのサア湯ざら
ぐ〳〵く実〳〵ぶつく茶ゴト小積よさるる九吉がむ
の中のぐ〳〵合ひ遠ひ行色と情彼米八を丹次

郎が障子の外へ出ぬけようとしてあけまべ
丹次郎へうつむいて書物をしらべ居るふりして仇吉
が小唐りせーと言へば丹次郎はそこまでさら
一アまつごいひ殘ーとてぶつみへトいまさくびれ丹
次郎　丹　ヨヤ米八う　米　そんなこと言ふ
私ごとうく来ましたへ宅へやるまいーー但し
仇吉の外へ番ごとと踏込へれを出しくお置きよ
うと　丹　何ぜいつまで物へ今ちごとこ巻さんがまと

横川の巻　米　アロム　こ巻さんが湯田ホ繋ぐ　清ん
ぶ　番ごやるのるもへーー泥ごトいひつ巻へ六疏め
ごとつぎ一口呑ぐく　米　ヨくしたもとうごョごろくーー
めへごるへおちーくお置きもへ義中ホるソ、おもソ
なぜさん言ホ吐言ぜいつごろう　米　ごろくも疏のサ
ちゃーいト巻屋をとうく水疏の際へ投出を。カラカラ
ヤ　米　ホ言ホ言ホ言ホ外へのごろうい　米　仇ごうんとまづホ
ホ　私ア支婦ごろう遠ぜとうい　丹　おもつま

ら〳〵へと戻りなぜ素人じみて媚をいふが仇吉ハ今障
つかまへ縁に付しより言葉をかけしがかゝりしなきに返事も素人めき
ゑへの不悪推も猶がありやア　米「そうさ通へ私がうるさいナ
外からの声を聞く縁の付合ふ男ハ弁をとり込で色さ
のくへ見んど二番目の狂言ど　丹「コウ〳〵通へてだろりいふぜ
米「ナゼコウ〳〵いいエコレ是を御覧仇吉さんが不審さうにさし〳〵
なるハ仇といふ字のきしその紋が何でうつるかあるか
丹「十二ぎ紙の紋ども甚だ似ものがあるめの　米「アレサア

まるヨサアソノよく眼をおいてごらんナ　丹「どうしてこのまゝど
うも解せねへふしぎなことだ。どうして請るものだト
ひとりごとをいふうちに米八ハ気がつき見れど丹次郎ハ考へ気でやゝしばらくものもいはざりしがそのうち　丹「コウ米八ハコレサア感心し
そうまがいゝてとなりの狂言ヲ見たる仇吉が是やさて紋切らしいこと
を言く時でここへ来てくゝつかてことを言時もあるけれど何でも
が外へ出のうつる頃かてがあるものゝ分一お前がたいそうな者で
紀浅草のことも見よへの尾の何り紙の何の角で
のと物入のつく中で着物の一枚でも拵へてまる身ぶり

故交
本町奎三馬

射して落涙なして泣めるそりやアかんにんよまだ
うち業ドあさんあ一生中よ私ガあまこをこうしてあのて
あまこのを助とのふも夫婦とあうて見んりやア悪でも共連でも
親ひとけごけまごを嫁さんとふのふるーー家その外よ勘云
仕義ドもの私ガ命りのとのそうかとけごあとのて私ガ勘して
おくうち男妾ごも聞く恋程よと一言のことでも言ようけやア
あさるめうとあ実意恋をして居るのよどふすればそんあれば
ろうあ子ア丹ーあどそんあ一思智をあくるのご女房おこて嫉ーー

モウいあのげんよあ丹ーあとうーガ門とあるとあ振ーーひ一型
の吠陽男門ーあく仇あさんと芸程ありあ丹ーあんでありさ
の吠よおのひもはあ丹ーて成いあのぞ一おのひも紙ごアこ
をあ看ーあ丹ーるに上ごき

いよいよ仇の吠くそくく
勘ガあ丹ーあ一普人米あるそく春の
俳ーあく今勘ガ大毛程門一回あ

廿三日夜九ツ時とんば丹後様へ
かねてかの浦へ参り待合申し候
必ず必ず違なくおいでくださる様御名前の
まゝの通りになりかへしたゝのしみまゐらせ候
御文も能くく頼み入候かしく
こなたよりとゞけまゐらする短冊
めでたく 米吉 筆の津の妙様

末「宮殿へやぶきてくるいけるど文まで丹後のお座しまで

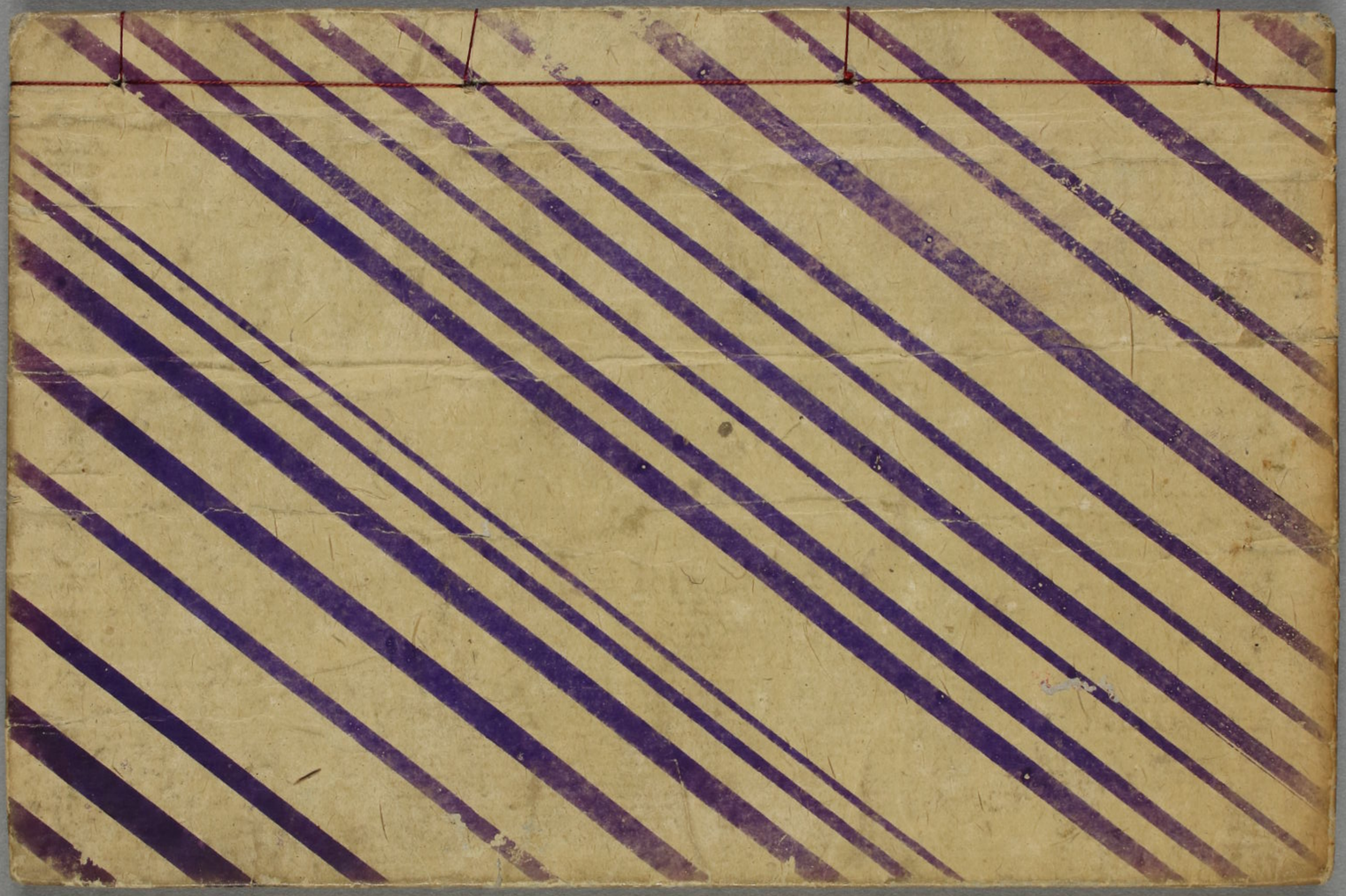
仇吉「仇吉さんの情で落した手紙の此書置へ来たん
の身で[illegible]此のしるしのうへやくそくで来たもおもひ
も情ある者の文サアトツく御覧ましおとなしト実つけてそ
丹次郎今さらあんと言ひつけも思案もつきね其の所へ
其後屋の若者障子を開けて
丹「ヘイお前さんがたへお出になりまし
ト越後縮の振袖の持参の所へ思七子の[illegible]のまさ
米「仇吉の濡絹を出して丹「オヤおまへさんも来たのかへ
ぎんでもよいト八子トやおらいひ恵みをうけ

用捨の紙よく過るやうにてもやくしてもなんとそう
いつくらんかヨ　若へイモウお越へ　まつ　米へアく　モウ又六日　あと　あふしまんであるよ　若へイく
四〜こそうりまし〜さト　ひり　ひく　米へサアはこそうでもあり　用
と着くおんせよや　ひく　ひきうるまつ　まちがい　遠やア　もものつ　冊へエそうそ　きもの
いつくわりぐそ〜ト　さ　ごく　の毒　そうなちつさくあ　米物紙
ひつ　よつ　ひく　引掛る　米八　そう　米　ま〜　そうよんく　米へ　ちんぐそんあふこ
ちぐ　ひきる　こも　ちつま　まつこ　ひきぐ　美後でも　ちら　ひ　へくりら四十

ちあ〜トいふ所へ　櫻川　由　浪華　障る　城よ　由へ　米さん　ろう　式
宅へ　米へヨヤ　由　さんおまいよ　由へナニモウさくハ　越ヨさん
ちぐそうつく〜　出　ひるそうぐ　ちつ　ひく　ぐ　ひつ　ひく　ぐ　ひつ　ひく　ぐ
言　雄の墨屋へ　ひく　ひるつ　ひく　ぐ　ひつ　ひく　ぐ　ひつ　ひく　ぐ　ひつ　ひく　ぐ
米へドレ　ひつ　ひく　も　支度　ひつ　ひく　ぐ　ひつ　ひく　ぐ　ひつ　ひく　ぐ　ひつ　ひく　ぐ
ところ　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく
ぬ　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく
ある　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく
ぬ　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく
か　冊へ　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく　ひく

あるまうの〜ト乙踐〜〜く行

○作者曰此情人の嗅花こんをとゞめ

どう〜〜こうの歌

春色梅児誉美巻の九了